



城

第五十六回

こうもうじょう 紅毛城

～台湾北部の史跡～

深草 祐一

今回は、台湾のお城を紹介します。台北郊外の観光地、淡水にある紅毛城こうもうじょうです。大航海時代にやってきた西欧人を、その髪の毛の色から紅毛人こうもうじんと呼んだりしましたが、紅毛人が築いた城ということで、地元民からそう呼ばれました。この城の歴史は、原住民の暮らす台湾に侵入してきた外来勢力の変遷の歴史でもあります。

台湾前史

考古学的には、台湾にも、中国大陸と地続きだった頃に渡ってきたと考えられる人類が居住した石器時代がありました。ただ、有史以来、三国志の呉志に夷州という台湾の特徴と合致する島に関する記述が見られる程度で、琉球王国のような王朝等があったという記録は無く、中国大陸の王朝の郡県制等に組み込まれていたことを示す確かな記録も無いようです。そして、明の時代までは、航海の際の一時的な寄港地、または倭寇の根拠地という程度の認識だったと考えられています。

大航海時代～紅毛人の来航

中国が明の時代、日本では室町時代の頃、西欧では大航海時代を迎え、アジア地域にもポルトガルやスペインの外洋船がやってきます。彼らは、いわば勝手に西欧諸国にとって未知の土地を「領有」し、植民地として経営するとともに交易の根拠地にしていきました。台湾にはじめてやってきた西欧人はポルトガル人でした。彼らは、緑に覆われた台湾島に感動して、「Ilha Formosa (麗しの島)」と呼んだといい、そこから台湾の別称である「Formosa (フォルモサ、中国語では美麗島)」が生まれたと言われています。やがて、台湾南部にはオランダが、台湾北部にはスペインが拠点を築いて勢力を競いました。スペイン人が台湾北部の淡水河を往来する船を監視できる河口近くに建設した「サン・ドミンゴ城 (聖多明哥城)」が、紅毛城の起源とされます。当時は、土



壘と柵で囲んだ防御構造内に何門かの大砲を配置した木造の施設でした。その後、原住民の焼き討ちにあったため、石造りで再建されたようですが、完成後間もなく撤退命令が出て、破壊されています。スペインがオランダとの勢力争いに敗れたためでした。そのオランダは、初め、中国大陸に拠点を設けようとマカオ攻略を目論みますが、うまくいかず、大陸と台湾の間の澎湖諸島ほうこを占領して城を築きました。そして、明の軍隊と2年にわたって戦った末に講和を結び、オランダ軍を台湾へ引き揚げることで決着しました。オランダは、タイオワン (大員) と呼ばれた台南沖の広大な砂州にゼーランディア城を築いて拠点とし、大陸からの移民を奨励してプランテーション経営を拡大していきました。この「大員」が「台員」や「台湾」と書かれるようになり、島全体の呼び名となったとも言われています。また、台湾原住民がオランダ人を「Tayouan」(現地語で「来訪者」の意味)と呼んだことから「台湾 (Taiwan)」という名称が生まれたという説もあります。

オランダとスペインは、20年弱の間、台湾で勢力を競い合いましたが、ついにオランダが基隆キールンでスペイン軍を破り、スペイン勢力を排除することに成功します。そして、サン・ドミンゴ城があった地に城塞を築き、当時の総督の名をとって「アントニオ砦 (安東尼堡)」と名付けたのでした。

鄭成功

さて、その頃、中国大陸では明が衰え、滅亡。その混乱に乗じて、北方から清が侵入してきます。明の皇族や遺臣達は「反清復明」のスローガンを掲げて抵抗しましたが、精強な清の軍隊に破れ、多くの者が清に降りました。その中で、鄭成功という人物は、明の復興を諦めずに戦いを続け、勢力挽回の根拠地を求めてオランダが支配する台湾へ軍を進めました。鄭成功は、ゼーランディア城を攻囲して、ついに陥落させ、台湾からオランダ人を駆逐。台湾に政権を確立しました。鄭成功は台湾外から来た者ではありませんが、後の世において、漢人による台湾独自の政権を樹立し開発を促進した人物とされ、「開発始祖」として顕彰されることになりました。ちなみに、鄭成功は長崎平戸の生まれで、母は日本人であり、その生涯は日本にも伝えられ、近松門左衛門作の「国性爺合戦」という人形浄瑠璃、歌舞伎で有名になりました。鄭成功によるゼーランディア城攻囲戦の最中に、アントニオ砦は淡水の原住民の襲撃を受け、オランダ人は城塞を爆破して撤退しました。淡水に入った鄭成功軍は砦を補修し、「淡水城」と名付けます。後に、東西南北の門を増築し、史書では「砲城」とされ、民間では「紅毛城」と呼ばれるようになったということです。

清時代とイギリス領事館の設置

台湾において「反清復明」のための政権を樹立した鄭成功でしたが、大陸において明の最後の皇帝が処刑されたという知らせが届く中、やがて病で死去。その息子達が政権を引き継ぎますが、清の討滅軍の攻撃を受け、鄭政権はわずか20年余りで終焉を迎えました。この時、清は、軍事上の観点から台湾を一応支配体制に組み込むこととし、1府3県を設置した上で福建省の統治下に編入しました。その後、台湾には対岸の各地から多くの漢人が移住し開発地を拡大していくことになります。この時代に移り住んだ漢人のことを本省人と呼び、後に蒋介石と供にやってきた人々＝外省人と区別されることになります。本省人は、主に福建省の泉州、漳州、そして広東省の出身者であり、特に広東省出身者は客家と呼ばれます。出身地ごとに言葉も習慣も様々であり、ささいなことから殴り合いが起き、村が襲撃される、「械闘」というグループ間での闘争が多く起こりました。清の支

配に対する民衆の反乱も多く起こり、小さな反乱は3年に一度、大きな反乱は5年に一度起こると言われたほどでした。この時代に、原住民の土地の多くが漢人の手に渡り、漢人と原住民との混血も進んでいきました。そして、清の時代の終わり頃には、移民意識が薄れるとともに、「械闘」を繰り返してきた泉州人、漳州人そして客家らの間に台湾人としての連帯感が生まれていったようです。

時代は下り、一度は追い出された西欧人が再び台湾へやってくることになります。アヘン戦争後の天津条約によって、台湾の淡水と台南の二港を開港させたイギリスの進出です。当時から栽培が盛んだお茶の他、原生するクスノキから取れる樟脳を輸出し、平均すると大陸よりも吸引者が多かったというアヘンを輸入して、大きな利益を上げました。この頃、紅毛城内にイギリスの領事館が建てられ、それが今に残されています。

その後の紅毛城

日清戦争後、下関条約で台湾と澎湖諸島の日本への割譲が決まり、いわゆる日本統治時代が始まりますが、紅毛城は引き続きイギリス領事館として使われました。第二次世界大戦を経て、1972年にはイギリスが撤退してアメリカの管理下に置かれ、1980年に台湾政府に引き継がれました。その後、第一級史跡に指定されて修復が施され、紅毛城、イギリス領事館ともに一般公開されることとなりました。幅の広い淡水河を挟んだ対岸の景色を高台から見下ろすことができ、館内の案内板には日本語訳も付けられています。台北を訪れた際には、淡水駅周辺の屋台を楽しむだけでなく、老街の先にある紅毛城にも足を伸ばしてみてください。



紅毛城(手前)とイギリス領事館(奥)